巻頭言

「美しい農村風景のために」

水田作研究領域長　田坂 幸平

今から35年ほど前、広島県福山市の中国農業試験場（現在、近畿中国四国農業研究センター）に採用され、数年後、岡山県笠岡市の干拓地の現地試験でイネムギ二毛作を経営している農家にお世話になったが、その農家の経営規模は10haで圃場枚数は100筆だったと記憶している。つまり、１筆当たり約10aであるが、現在でも、瀬戸内海沿岸部の水田の１筆面積は当時とそれほど変わっていないというのが、最近香川県に２年間赴任した時の印象である。特急「南風」から見る小さな圃場と、香川赴任中に何度も利用した巨大な瀬戸大橋との対比は、日本の科学技術と農業行政施策との間のひずみを映し出しているようにも思える。

20年程前、中国黒竜江省に出張した時、地平線まで果てしなく続く畑や田んぼにダイズやトウモロコシ、イネなどが栽培されてるのを見た。ハルピンから車で３時間のこの場所の、水田の１筆当たりの面積は日本並に小さいものの、コンバインが畦を楽々と乗り越えながら直進作業をする姿に一種の感動を覚えた。土地全体がほぼ均平なので、畦は日本のように水を溜めるためというより、土地の境界線替わりなのだろう。機械化と呼ぶには未成熟な農業技術ではあったが、あの水平な基盤の上で巨大なトラクタが動き回る日はそう遠くないような気がした。

10年程前にイタリアのミラノ近郊の水田を見た時、その風景の美しさに感動した。イタリアはかつて日本と同様に田植えによる水稲栽培をしていたが、日本が田植機による機械化一貫体系を開発したのに対し、イタリアは直播へと向かい（写真）、圃場規模を拡大して現在平均一筆２haの区画となっている。古びた赤煉瓦の建物は広い緑の水田や青い空と一体となり、独特の美しい風景を形作っている。

翻って国内に目を向けると、北海道の十勝の畑作地帯では、現在１戸当たりの平均耕作面積が40haを超え、100ps級のトラクタを中心とする大型機械が広い圃場を走り回っている。GPSガイダンスの普及は播種作業や管理作業に利用するブロードキャスタなどの広幅作業機の効率的利用を可能とし、近い将来、上川、空知の水田作地帯も含めて、ヨーロッパ並の規模の農家が軒を連ねると予想される。

さて、それでは、この筑後研究拠点のある北部九州はどうだろう。筑後平野や佐賀平野の水田地帯には、基盤整備事業により、１筆30～50a規模の圃場が多数存在し、瀬戸内海沿岸部の水田の景観と一線を画す。元々、関東以西の地域は裏作ムギの栽培が可能な地帯であるが、現在、北海道以外でまとまってムギを作付けしているのは、関東以西では北部九州を中心とするイネムギ二毛作地帯だけである。春と秋の作付け切替時には、短期間に風景が一変し、麦秋から青田へ、黄金色の稲穂から刈田へ、そして麦畑へと変わる様子は世界でも類を見ない風景と言える。

九州に赴任して以来、九州百名山を始めとする九州の山々に登り続けているが、山への行き帰りで農村の風景に出会う時、感動するのは、良く管理された田畑や森、整然と並ぶ作物列と、それらを取り巻くトンボの群れや新緑や紅葉の森の風景である。美しい農村風景は健全な農業が営まれていることを示す尺度であり、結果でもある。折しも、TPP交渉が大筋で合意された歴史的な時期に際し、今後の日本の農業の発展と美しい農村風景のために試験研究機関ができることを再確認したい。

イタリアでの水稲の直播
トラクタの後ろの機械（ブロードキャスタ）から稲の種籾を散播しています。